リレー小説

令和3年

日本女子大学 児童文学研究会 ひなぎく

リレー小説 とは?

☆1 グループ 4 人でお話を繋げる

☆書き出しはどのグループも同じ

この 2 つがルールとなっています！

そして、今回の書き出しはこちら↓

「やっと終わったぁ…」

ぐっーと腕を伸ばし、軽くストレッチ。

パソコンとの睨めっこで疲れた目を軽く揉んで、やっと終わったことにホッとした。

さてと、と電源を落とすためにパソコンに再び向き合おうとしたところで自分の画面

にはないアプリがあった。いつもの自分なら疑問に思ってすぐに消すはずなのに、こ

の時の自分は惹かれるままにクリックする。

カチッ

「！！？　な、なに！？」

さて、この書き出しからどんな物語が紡ぎだされたのでしょうか

次のページからどうぞ、みなさまお楽しみくださいませ♪

僕の妹

ほのか

ななみ

いづみ

ことね

「やっと終わったぁ…」

ぐっーと腕を伸ばし、軽くストレッチ。
パソコンとの睨めっこで疲れた目を軽く揉んで、やっと終わったことにホッとした。
さてと、と電源を落とすためにパソコンに再び向き合おうとしたところで自分の画面にはないアプリがあった。いつもの自分なら疑問に思ってすぐに消すはずなのに、この時の自分は惹かれるままにクリックする。
カチッ
「！！？　な、なに！？」
クリックした途端、部屋中がまぶしく光り、思わず目をつぶった。
「お兄ちゃん…！」
どのくらい時間がたったのだろう。突然後ろから声が聞こえて目を開けた。目の前の景色は変わっていない。不思議に思いながらも声がしたほうを振り返ると、高校生くらいの女の子が立っていた。どこかで見たことがあるような気がするが思い出せない。
「お兄ちゃん…！」
彼女はもう一度言った。明らかに自分に向けて言っている。
（俺のこと…？おかしいなぁ、俺には妹なんていないのに…）
「悠！」
「ん！？俺のこと！？」
思わず返事してしまった。
「当たり前じゃん。ほかに誰かいる？まさかあたしのこと知らないとか言わないよね？」
「…」
こうなったらわからないと正直に言うしかない、と思ったら、
「まあいいや。急がないといけないし」
彼女はそう言ってくるりと振り返った。
「ちょっと待って。今どういう状況？そもそもここ俺の部屋だよね？」
「えっ、お兄ちゃん何も知らないの？今まで何していたの？」
「何していたって、大学の課題終わらせていただけだけど…」
「ということはパソコンアプリに反応してくれた？」
「あ、あれってあんたがインストールしたの？」
「あんたなんて呼ばないで。七菜って呼んで！あとアプリ入れたのはあたし！」

「あ、そうだったのか。でこれからどうするの？」
「んー、とりあえずこれを見てもらおうかな。そうすれば何となく状況がわかると思うから…」
そう言って七菜はポケットからスマホを取り出した。そして慣れた手つきで操作すると、画面を自分のほうに向けた。
「な、何これ…！？」
思わず叫んでしまった。
七菜のスマホの画面に映っていたのは、家の周りの変わり果てた姿だった。
「え、でもここって俺の部屋…だよね…？」
「ちょっと外見てみて」
七菜に言われて窓の外を眺めると、
「え」
思わず固まってしまった。窓の外の景色は、七菜が見せてくれた写真と全く同じ光景だったのだ。
「ど、どういうこと…？」
「話すと長くなるからここでは具体的には言わないけど…。一言で言うと、この町を壊された」
「誰に？」
「アメニンズっていう謎の集団。2週間前に突然現れてこの街を荒らして帰ったの。町の人たちはみんな逃げて無事だった」
「で、町を救うために七菜が立ち上がったと」
「そういうこと。戦う必要はないみたいだからあたしにもできると思って。だけど実際にやってみたら思ったよりも難しくて…」
「それで俺に助けを求めたと」
「うん。お兄ちゃん注意深いから心当たりがないものはすぐ消すかなって思ったけど、今回は気づいてくれてよかった」
「何となく気になって無視できなかったから…」
無意識のうちに何かを感じ取ったのだろうか。
「じゃあ早速説明するね。これからあたしたちは３つのものを探して市役所に届けるの。そしたらこの町も元に戻る」
「３つのもの…？」

「そう。探すものはこのスマホに写真があるから大丈夫。で、それを今日中に届ければ町は元に戻る」
「今日中か…。今何時？」
「朝の９時。時間は結構あるけど、ものがどこにあるかがわからなくて…」
「じゃあ急がないと。探すのに時間がかかったら間に合わなくなるかも」
何だか楽しみになってきた。テンションが上がっている自分の様子を見て七菜も笑う。
「よかった。お兄ちゃんが乗り気になってくれて。断られたらどうしようって心配だった」
「確かに最初はよくわからなかったけど、というか今も若干謎は残っている感じはするけど、とにかくやるしかないと思って」
「ありがとう。じゃあ早速出発するよ！持ち物は携帯だけで大丈夫」
「了解。一応連絡先交換しておく？」
「いや、もうお兄ちゃんの携帯にあたしの連絡先登録されていると思う」
「え？」
驚いて自分の携帯の電話帳を開くと、確かに「七菜」という名前で電話番号が登録されている。
「いつの間に…」
「えへへ。そんなことよりそろそろ行くよ。準備はバッチリだから」
「はーい」
不思議に思いながら返事をして立ち上がる。七菜も振り返って歩き出した。

「こっちだよ〜！」
荒れ果てて歪んだドアを開けようとしている俺に声をかけた七菜は涼しい顔で歪んだ窓と壁の間にできた隙間を通って外に出た。
いや、この隙間ギリギリだぞ！俺が通るには厳しい…。案の定尻辺りでつっかえてしまった。
「しょうがないな〜よいしょ！」
なんと七菜が蹴り上げた窓の縁は少し凹んで俺の体がギリ通れるようになったのだ。
踏み入れた荒廃した外の世界は舗装した道路なんてもちろんない。倒れた電柱を飛び越えたり斜めになっている看板をよじ登ったりしながら進むなんてどんな探検隊なんだと苦笑しつつ七菜の後をついていく。
七菜は花のような可愛い見た目とは裏腹にとても強い。窓の縁を蹴り上げたときから薄々思ってはいたが、目の前に立ちはだかった崩れかけた塀を拳で砕いたときに確信に変わっ

た…。ゴリラ並みではないか？
「七菜って格闘技か何かやってんの？強すぎてむしろ俺足手まとい？って感じなんだけど」
「ん？どうでしょう？でも、お兄ちゃんの方が強いんだから必要だよ！」
「え？」
いや、どう考えたって七菜の方が強いだろ。俺も昔は空手をやっていて強い方だったと思うが、それでもゴリラパワーには劣ると思うぞ！
なんだか訳が分からないことだらけだ。荒廃した世界、アニメンズ、市役所…でも確かに俺は何かを知っているんだと思う。七菜のこともこの不思議な状況もなぜか疑念より楽しいが勝って感じるんだ。
「なあ、さっき言ってた３つのものって何？今どこに向かってるんだ？」
「…なんだろうね！でもきっとこの先にあるの」
「ここって…石碧神社？」
初詣のときくらいしか人が来ない古い神社で、鳥居までの石の階段が一段一段高くて段数も多い。しかも荒廃した階段はさらにサバイバル感が増していた。ゴリラ並みの身体能力を持った七菜は迷わずどんどん進むけど、俺はこれまでで体力も減って気力は尚更ない。俺が登り切ったころ、七菜は真剣に何かを探していた。
「何を探してるんだ？」
「分からない。でも、絶対ここにある。」
「え？何を探しているかも分からないのに探すの？どういうこと？」
「…うん、でも思い当たるのはこの場所。」
「…分かった。街を元に戻すんだもんな！七菜の勘を信じるよ」
……と探し始めて気づけば日が真南に。初夏の真昼は汗が滴る暑さだ。
「はあ、見つからないな。ちょっと休もうぜ！」
「…私はいい」
「おい、あんまり無理すんなよ」
実はさっきから同じ会話を何回かしている。七菜はこの神社に来てから真剣そのもので、気のせいか態度が冷たくなってきた。なんか悪いことしたか？街の存亡がかかっていると言われればそうだが、俺はなぜか結構楽しい気分でいる。
七菜が木の根本に足をひっかけてこけた。
「なあ、ちょっとバテてるんじゃないか。いくら街の存亡とはいえ、お前が倒れたら楽しくねえよ。」

「でも、絶対ここにあるの。今探さないといけないの。」
「なあ、やっぱ少しふらついてる。俺もちゃんと探すからこれ飲んで一旦休めよ。熱中症予防のためならお清めの水も飲ませてくれるだろう。」
水を飲むよう促して、俺はもう一度探しに出た。俺一人だったら今頃諦めて木陰で街が滅ぶまで寝てるかもしれない。なんだか本当に妹ができたみたいだ。
「ああ、いつだったか。前にもこんなことあった気がするんだ。ぼんやりとしか覚えてないけど、ガキの頃にゲーム買ってもらえるようにってこの神社にお祈りしにきて…。そしたら石を失くしたっていう女の子が泣きながら探しててさ、倒れそうだったから休ませて手をかしてやったわけ。」
「その石、どこにあったの？」
「えっと確か…日が沈んで諦めて神社を出たとき、石段のところで？」
七菜は走って石段を降りて行った。俺も後を追って…一段目の石段の外れに光る石を見つけた。
「あ！！これか？綺麗な緑色の石。エメラルドみたいだ！」
「…そう、絶対それよ！それが１つ目のアイテム」
七菜は静かに頷いた。その目はアニメに出てくる少女のように煌めいていた。
……
「さ、次はこっち！絶対こっち！」
「おい！さっきまでのバテはどうした？ガードレール余裕でぶち破るとか本当にゴ…すげえな！！」
「ねえ、ゴリラって言いかけたでしょ？」
「え…まあ、いやでも、そうじゃん…？」
「ひど！お兄ちゃんがそんなこと言うなんて！私がゴリラならお兄ちゃんは闘牛か何かよ！」
「なあ、さっきも俺の方が強いとか言ってたけど、それって見た目だけだろ？確かに年上の男だけど、ゴリラが相手なら話は別だろ！」
「ゴリラ…まあ、私も強くなったかな。でもお兄ちゃんは強いよ。」
なんか、急に静かになったりうるさくなったり本当に不思議で楽しい妹だ。
荒れ果てた街に残る食料を漁って腹を満たしながら進む。スマホを見るともう午後２時！
暑さがピークだけど、ゆっくりしてはいられない。タイムリミットまであと１０時間。
舗装が崩れた道なき道を歩くのも慣れてきたとはいえ、大分歩いて疲れた。隣の駅まで来て

七菜の足がようやく止まる。
「ね、着いたよ！」
「え？蕾坂公園？」
「そう、この公園！早速探そう！」
「ああ」
なんでか、さっき緑色の石を見つけたときガキの頃の記憶が頼りだった。この公園もガキの頃たまに来ていた気がする。何かあったか？思い出せ、探しながら…。
「お兄ちゃん、これ何？」
「え？ああ、ヒメジョン。ただの雑草だよ！」
「へえ、綺麗だね！雑草に見えない」
さっきの神社での冷たい空気とは一変、しきりに話しかけては花の名前を聞いてくる。俺は探しながら思い出すのに必死だっていうのに。こんな調子であっという間に 1 時間が経過…女の子と遊んだといえばブランコ？ドッジボールする広場？なぜか見つからない。
俺の記憶で見つかったというのは気のせいだったのかもしれない。
そんな折、ひときわ存在感を放つ花壇を見つけた。それを目にした七菜が目を見開いた。
「これは何ていう花！？」
「これは…。」
そう答えようとした瞬間、記憶にかかっていた霧が晴れ始めた。

かつての曖昧な記憶の中の女の子は、神社で緑色の石を見つけて俺に礼を言うと、風のように消えてしまった。その日は不思議に思いつつも帰路についたのだった。それから数日後、いつものように公園で遊んでいると、花はおろか雑草すら生えていない花壇にじょうろで水をやっているあの女の子を見つけた。俺はそっと声をかけ、何をしているのか尋ねた。
「私の知り合いが植えた花の種が芽を出すように水をあげてるの。」
女の子はそう言って微笑んだ。以降彼女を見かけることは遂になかったが、しばらくして花が咲いた。翌年からは地域の人に見守られながら毎年花を咲かせていた。それがホトトギスだったことを知ったのは高校生のとき、一息つくために自室から居間に向かおうとしたところで、ふと小学生のときにクリスマスプレゼントとして贈られた植物図鑑が新品のまま落ちているのを見つけた。適当なページで図鑑を開くと例の花が載っていた。今まで花に関心を持ったことはなかったのだが、なぜか心が躍るのを感じ、いつしか図鑑 1 冊を読み終えていた。植物に興味を持つようになり、今では雑草でさえも見分けがつくようになった。

人生のターニングポイントともいえるこの出来事を忘れていた自分に驚いていると
「ちょっと、どうかした？ぼんやりしちゃってさ。」
声に気がつきはっとすると、覗き込むように七菜に見つめられている。
「あ、ああ…。この花はホトトギスっていうんだが、もしかしたらさっき話した女の子の話に関係があるかもって思い出したんだ…！」

ホトトギスに関する話を七菜に聞かせると
「間違いない、これが 2 つ目のアイテム…。」
七菜の閃いたような明るい声に反応したのか花が光り始め、自然に花壇から根っこごと浮き出てきた。引っこ抜くのは忍びないと思っていたから助かった…。そう思っているとある疑問が頭に飛び込んだ。
「そういや、なんでさっきからアイテムの写真を見せてくれないんだ？俺が見たら石だってもっと早く思い出せただろうし、花もどんな花かすぐにわかって早く見つかったんじゃねえか。」
「いや、実は…。アイテムの写真はこのスマホの持ち主だけにしか見ることを許されてないの。つまり私だけってことね…。その上アイテムの特徴を言うのも駄目みたい…。」
ただでさえ難題を突き付けられているっていうのに…。
「なるほど、意外に制約が多いんだな…。」
俺がぼやくのを横目に七菜はいたって冷静な様子で
「それより、3 つ目のアイテムを早く見つけないと！」
そうだった。自分のスマホを再度見るとあと 10 分もしないうちに午後 5 時を迎えようとしている。
「次はこっちの方向…。」
七菜が駆けていく。確かその方向には…。不安になってすかさず七菜に確かめる。
「そっちには林が広がっている以外何もないはず…。こっちで合ってるのか…？」
「合ってるはず。多分こっちの方にいると思う。」
いる…？多分ある、の間違いじゃないのか？それとも生き物か何かなんだろうか？必死に七菜を追いかけながら考えているとあっという間に午後 5 時を迎え、遠くの方から子どもたちに帰宅を促すチャイムが流れているのが聞こえる。疑問が尽きないものの、時間がないのも確かだ。七菜に導かれるままに進んでいくと案の定樹木が並んだ林に入った。

七菜は低い体勢でまたアイテムである何かを探し始めた。長い間動き続けているからか、探し始めた時と比べると俺も七菜も動きが緩慢になりつつあるが、それでも意地と気合いで何とか持ちこたえているといったところである。時々集中が途切れそうになるとお互いに叱咤激励しながら探し続けた。夕食を求めてお腹が鳴り始めたとき、突然それは現れた。

草むらからガサゴソと音がするのを耳にした七菜は口に指を当てて静かにするようにとジェスチャーをしつつ、静かに物音の方に近寄っていく。俺も手伝わなくては、と思いそろそろとついていく。七菜が手を伸ばして何かをつかんだ。
「そこの段ボール箱を取って！」
言われるがまま、捨てられていた段ボール箱を拾って差し出すと七菜はつかんだ何かを箱の中に放した。恐る恐る中を見ると蛇がこちらを眺めていた。

俺の記憶に蛇が関係あるのだろうか…。首をかしげているとまたもや記憶の映像が、今度はより鮮明に頭の中で再生される。そんな感じだったなあ、と心の中でうなずいていると公園にいるときにはなかったシーンがあることに気づく。

女の子と一緒に緑色の石を探した後、家に帰るために 2 人で神社から出て 5 分ほど経った時分か、なぜか迷子になり、林のそばまで来てしまっていた。
「ここ、どこだろう…。」
今にも泣きだしそうな女の子を励まして進んでいくと小さな蛇がこちらを見ている。そうかと思えばその蛇は、今度はそっぽを向いて進んでいってしまう。興味を持った俺たちは夢中で蛇についていった。途中で蛇を見失ったかと思うと、いつの間にか元いた神社に 2 人で立ち尽くしていた。

「これが、あのとき助けてくれた蛇…。」
そう言うと花のときと同様に蛇が光りだした。
「良かった…これでアイテムが揃った。」
七菜がつぶやくと目の前がぐるぐると回り始め、

次に視界がはっきりしたときには建物が目と鼻の先というところまで来ていた。アメニンズに荒らされたときのままなのか、外壁にはひびが入っている。市役所と書かれている即席

の看板があるのを確認するやいなや、急いで駆け込んだ。
中にはいくつか長椅子が並んでいる先に窓口が並んでいた。訪問者は俺たち 2 人だけのようだ。
「すみません。この街を元に戻すために必要なものを見つけてきたんですけど…。」
七菜が窓口にいる職員らしき人に声をかけてアイテムを手渡すと、その人はお辞儀をしてから丁重に受け取り、窓口の奥の部屋に下がってしまった。代わりに別の職員が出てきた。
「俺、この街の状況を把握できてないんですけど、なんでこの街はアメニンズとかいうよくわからない集団に荒らされたんですか。それとアイテムを集めることで街が元通りになるんですか。」
ここぞとばかりに質問を投げかけた。
「…これは内密にしていただきたいのですが…。」
職員が言いづらそうに口を開いた。
「アメニンズは謎の多い集団で、不老長寿や不老不死を目指していると聞きました。ある特徴をもった自治体を標的として襲い、提示した交換条件を飲めた自治体だけ復旧するという行動を繰り返していて、国際的に危険な集団だとされています。この街が要求されたのは不老長寿の象徴であるジェード、ホトトギス、蛇を集めろ、というものでした。そして妹さんに探し出すのをお願いしたのです。」
あの緑色の石はジェード、つまり翡翠だったのかといった具合に話を聞いていると今度は七菜が話し始めた。
「私ひとりじゃ心もとないと思ってお兄ちゃんを呼んだの。…パラレルワールドからね。」
パラレルワールド…。つまり並行世界だというのだろうが、にわかには信じがたい。
「信じてもらえるかわからないけど…。遠い昔、何らかの拍子にパラレルワールドが形成された。ここの世界はお兄ちゃんがもともといた世界とは違って不思議な現象が起こる。それにアメニンズもこっちの世界には存在するけど、お兄ちゃんの世界には存在してない。お兄ちゃんを呼ぶために 1 年に 1 回だけ許可されているパラレルワールド同士での人の入れ替わりをしたの。私にはこっちの世界にもお兄ちゃんはいるんだけど、ずいぶん前に家出したきり連絡が取れなくて…。だからパラレルワールドにいるお兄ちゃんとこっちの世界にいるお兄ちゃんにアプリを使って入れ替わってもらったの。」
情報量の多さに圧倒されたが、気になることが出てきて思わず口をはさんだ。
「ええと、じゃあここの世界の俺は俺がもともといた世界にいるってことか。」
「そう。あと、女の子に会った時の話をしてくれたけど、あれはたぶんあたし。そのときは

今回みたいな入れ替わりがお兄ちゃんと別の人とで起こったんだと思う。何が引き金になってそうなったかはわからないけど、意図せず入れ替わりが起こった、っていう事例は時々あるからね。」
「完全には理解できたわけじゃないけど、とりあえず少しは納得。このあとはどうすればいい？」
「市役所がアイテムの確認をしてから、アメニンズに伝える。アメニンズが承諾したら町が元通りになるって。」
なんとなくの段取りを把握したところで、職員の話が途中になってしまったことを思い出した。
「そういえば、ある特徴のある街ってどういう特徴のことですか。」
「それについては後で順を追って説明いたします。」
なんだか流されたような気がしたが、気に留めている余裕もなかったため、ひとまず市役所の職員による確認が終わるのを待つことにした。

「七菜。」
近くにあった無事だったらしい自動販売機でお茶を買い、七菜に渡す。パラレルワールドでもこの小銭が使えるのか不安だったが、問題なく買えた。
「ありがとう、お兄ちゃん」
心なしか青い顔をした七菜は受け取ったお茶を飲む。あれだけ動いたのだから、具合が悪いのも仕方ないだろう。熱中症にならなかっただけいい方かと思い、隣に腰を下ろした。
「…よく付き合ってくれたね。ありがとう。」
唐突な言葉に横を向くと、手にかかえたペットボトルに目を向けた七菜がいう。その視線には先ほどまでの切迫した感情がなく、よく分からないながらにようやく落ち着いたらしいと思う。
「楽しかったよ。俺、妹なんていないし。」
「そうだよね。」
なぜ泣きそうな顔で笑うのか、その時の俺にはわからなかった。

「お待たせしました。悠様、七菜様、こちらでアメニンズがなぜこの街を襲ったのか、ご説明します。」
随分と機械的な女性に呼ばれ、無機質な会議室に迎え入れられると、ひとりの男が座っていた。
「ようこそ。課題をクリアしたそうだね。この街を元に戻そう。私はアメニンズの役員だ。好きなように呼んでくれ。」

いけ好かない男…スーツを着ている不審者が多いと聞いたのは小学生の頃だっただろうか。防犯ブザーを鳴らしたくなるような胡散臭さに、俺は七菜との距離を詰める。
「はじめまして。街を戻してくれてありがとう。随分理不尽なように思うのだけど。」
先ほどまでと打って変わり、瞳に挑戦的な光をたたえる七菜。胡散臭い男との間で火花が飛んでいるのが見えるが、正直俺は逃げ出したい。
謎なんてどうでもいいです、元の世界に返してくださいさようなら。と言おうか悩んでいると、
「あ」
七菜の手が、体の後ろで震えていることに気がついた。住んでいる町が急に壊され、パラレルワールドから行方不明の兄のような人を呼んでこいと言われ、問答無用で三つの宝を見つけ出せ、そうでなければ街は滅びると言われた少女。必死にアイテムを探していた七菜を思い返す。ゲーム感覚で参加して、どこか現実味が薄かった俺は、これが七菜にとっての現実だったのだと気づく。
「アメニンズさん。なぜこの街を破壊したんですか」
急に責任感が出てきた俺は七菜を庇うようにして聞いた。
「この街が他のパラレルワールドに近い場所だからさ」
よくぞ聞いてくれたと言わんばかりに口角を上げ、熱に浮かされたように男は語り出す。
「パラレルワールドと過去、無作為につながったことのある街。そしてその中で人の行き来ができる街。君自身もかつて意図せず入れ替わっていただろう。その原因がわかれば、時空への負担を考えて年に一度の入れ替わり、などとケチくさいことを言わずとも、何度でも入れ替わることができるようになる。」
だったら何だというのか。入れ替われるようになることが、街を破壊するほど大切なことだとは思えない。
「入れ替わると何が起こるか。アメニンズの幹部はこう考えてみた。理不尽な理由で死んでいく人達をもしも死ななかったら、というパラレルワールドの世界で生かすことができるのではないかと。」
「無理よ。」
七菜が言った。
「パラレルワールドに移動したら人が入れ替わる。同じ世界に同じ人は存在できない。どちらかが生きればどちらかが死ぬ。」
「だからなんだ？」
アメニンズが微笑む。
「人は皆、どこかの世界線で生きている。けど同時に繋がっているんだ。二人とも、それを感じなかったかな？」
「何を言って」

「君の兄は行方不明だ。この世界で生きている七菜くん。そうだろ？それでも君は躊躇うことなくパラレルワールドでの兄を見つけた。七歳の頃から行方不明になっている兄の成長した姿をだ。それはなぜだ？」
「それは昔、会ったことがあるからで…」
「十何年も前にたった３度会った人の顔がわかるほど、君の記憶力はいいのかい？それとも、十何年前と今の彼は変化が全くなかったのかな。」
七菜と出会った頃、俺はまだ小学生だった。当然、子どもの姿だったはずだ。
沈黙した七菜を見て、満足そうにアメニンズは頷く。
「悠くん、君は記憶が蘇るような感覚を覚えなかったかな。」
「…はい。」
それぞれのアイテムを見つけた時、七菜の姿を見た時。普段は慎重な俺が、ここまで巻き込まれることに決めた理由。
この子は俺の妹だ、という確信。俺はもう、気がついていた。
「ここは、『俺に妹がいたら』というパラレルワールドなんですね。」
それだけじゃない。この世界は、俺が誰よりも、よく知っている世界なんだ。
「その通り。それぞれのパラレルワールドにいる人々は、深層心理では繋がっている。ひとつの存在でありながら、その人の歩む可能性がパラレルワールドとして出現しているんだ。どこかで生きてきれば、それは永遠の命と言えるだろう。」
この世界が、見覚えのある場所しか映さない理由。
「私たちはどうしたら行き来できるのかを研究するために、街を破壊した。パラレルワールドに行き来できない街はいらないからね。残った街だけを動かせば、不老不死の未来は手に入る。」
「違うね。」
はっきりとした声が出た。俺はもう大学生だ。妹はいない。慎重すぎて、コロナ社会とかオンライン社会とか言われる今入学して。友達なんてできなくて、一人暮らしの部屋で課題をやっていた。どんなに退屈でも、それが現実だ。
「この世界は、『俺に妹がいる世界』。そしてそれは」
七菜。俺の可愛い妹を見る。よく見たら似ても似つかないけど。
いじめられっ子だった小学生の頃、何度も想像した。俺には本当の家族がいて、決して怒らないお母さんと、働き者のお父さん。そして可愛い妹がいて。大昔に行方不明になった俺を探してる。
ある日妹が会いにきて、一緒に遊ぶんだ。
妹は俺のことをすぐに見つける。だって兄弟だから。かわいいからクラスメイトから一目置かれて、俺も人気者になる。別れてから１日も、俺は彼女を忘れたことがないことにしよう。彼女も同じように、俺を想ってる。

一緒に遊ぶんだ。現実の俺が、一人で過ごした場所で。あの境内で妹は必死の顔をして綺麗な石を探すだろう。この草何の名前？って聞かれたら、調べてやるんだ。空手のある日には一緒に道場へ行こう。俺の妹だから、私もやりたいと言うだろう。俺にはなかなか勝てないけど、きっと彼女も強くなる。
毎日毎日、夢中になって空想の世界で遊んだ。俺にとっては、空想の中の自分が本当の自分で、その世界が現実だった。
大人になって、そこそこうまく周りに合わせることを覚えて。イマジナリーフレンドとかいう言葉も知って。忘れていた。なかったことにした、俺の思い出。
薄暗い過去とは別にある、幸せな毎日。
「七菜。会えて良かった」
大きくなったね。
「お兄ちゃん…？」
突然様子の変わった俺に、戸惑う七菜。
この子にとっての現実が、この世界であるのなら。
「七菜。お兄ちゃんがみんなと今仲良くできているのは、七菜のおかげだよ。君も幸せに生きて。これから、君は大人になって、この街にいる家族と共に、平和にずっと暮らすだろう。」
そこに僕はいないけど。
「いい、よく聞いて。君の兄はどこか遠いところで幸せに過ごしている。たまには、君と過ごしたことを思い出して笑ってたりするかもね。大丈夫。もう心配しなくていいんだ。今の家族も、すごくいい人なんだから。」
だからもう待たないで。俺はもう、大人になったんだ。
「お兄ちゃん、いかないで」
あぁそうだ。あの頃の俺は俺を必要としてくれる人を求めていたんだ。
「幸せでいろ、七菜」
アメニンズに向かい合う。
「この世界は。俺が作り出した世界だ。お前達は必要ない。消えろ。」
「何をバカな。もうこのパラレルワールドは成立して」
「不老不死じゃだめなんだ」
変わりたくない。ずっとこの空想に浸って生きていきたい。これが現実だったら良かったのに。そう思うのは、とっくの昔に終わりにした。
「例えしんどくても、つらくても、明るい未来を信じて成長しようとする人がいる。」
街を壊されながら、帰ってくることを信じてアイテムを探した七菜のように。
俺が辟易したオンライン社会だって。明るい未来を信じて、進もうとした人がいたはずだ。
「俺は、その人たちについていこうとするので精一杯だけど。」

けど、進みたいんだ。
「何が正しいかはわからない。けど、不老になってしまったら、成長することはできないんだ。」
七菜たちと遊べなくなってから見えたものだって、沢山あったんだ。
「失せろ。」
七菜を開放してあげよう。
アメニンズの顔が歪む。
視界が白くなる。
「七菜」
ありがとう。
抱き寄せたつもりの小さな体は、俺の前から消え失せていた。

目の前にはパソコンの画面。
やり終えたらしい課題のファイルは、デスクトップに行儀良く並んでいる。
「やっと終わったぁ…」
ぐっーと腕を伸ばし、軽くストレッチ。
パソコンとの睨めっこで疲れた目を軽く揉んで、やっと終わったことにホッとした。
さてと、と電源を落とすためにパソコンに再び向き合おうとしたところで自分の画面にはないアプリがあった。
「なんだこれ？」
クリックしようか一瞬悩み、
「ウィルスとかだったらやばいよな。やめとこ。」
ゴミ箱の中に入れておく。

「誰か変なアプリ入った人とかいるのかな。」
寝転びながら検索しようとスマホを手に取り、
「やっぱ先食べよう」
机に放置し、キッチンへ向かう。
俺が同じ学部にいる「七菜さん」からの通知に気づくまで、あと数分だ。

花の妖精と少女

はるか

かえで

まゆこ

みくる

「やっと終わったぁ…」

ぐっーと腕を伸ばし、軽くストレッチ。
パソコンとの睨めっこで疲れた目を軽く揉んで、やっと終わったことにホッとした。
さてと、と電源を落とすためにパソコンに再び向き合おうとしたところで自分の画面にはないアプリがあった。いつもの自分なら疑問に思ってすぐに消すはずなのに、この時の自分は惹かれるままにクリックする。
カチッ
「！！？　な、なに！？」

　目の前が突然真っ白な光に包まれ、その眩しさに思わず目を閉じる。
　しばらくして恐る恐る目を開けると、そこには鮮やかな青色をしたネモフィラの花畑が一面に広がっていた。
「ここ、どこ…？」
つい先程まで家にいたはずだ。これは恐らく夢なのだと、頬を思いきりつねってみる。
「いっ…。」
その痛みにこれは現実なのだと少しずつ理解する。あの見知らぬアプリを開いてしまったことが原因だろうか。しかし、こんなアニメみたいな展開が実際に起こるなんてと、目の前に広がるこの非現実的な光景をぼうっと眺める。ふつふつと湧き出てきた不安感をかき消すように、なんとかして家に帰らなければと、勢いよく立ち上がる。周りに誰かいないか探してみたものの、人どころか動物や建物すらも見つからない。ただ小さな花々が鮮やかに咲き誇り、風に吹かれて私の足元をくすぐるだけだった。

　しばらく歩くとどこからともなく声が聞こえてきた。
「ね…、あ…た…。」
しかし、声の主はどこにも見当たらない。
「ねぇ、あなた。あなたよ、あなたに言ってるの！」
ふと下を向くと青い花のなかにポツンと一輪だけ小さな花々のなかでひときわ目立つ少し背の高い赤いポピーの花が咲いている。
「は、花が…喋った…。」
「やっと気がついたのね。ねえ、あなた見ない顔だけど、どこから来たの？」

「私はさっきまで家にいて、そしたら突然…。…ここはいったいどこなの？」
　ポピーの花は 1 人でペラペラと話し始めた。彼女の話によると、ここは全ての生き物たちが自我を持つ世界であり、人間という生き物はこの世界にはいないということ。そして、数日前に現れた魔女によって彼女以外の生き物の自我が失われ、その後初めて訪れた自我を持つ者が私であったらしい。
「ひとりぼっちは寂しいわ。どうか、これまで通りお喋りできるようにみんなを元に戻してほしいの。」
そんなことを言われても私はただの人間で、なんの力も持たない。たった数時間前にこの世界に来たばかりの私にいったい何ができるというのだ。むしろ私の方が助けて欲しいぐらいだ。そんな思いをこめてポピーを見つめると、
「それなら心配ないわ。魔女が言ってたもの。人間という生き物が私たちを救ってくれるだろうって。きっとこの世界が元通りになれば、あなたも元の世界に帰れるわ。
とりあえず、あそこの湖に行ってみましょうよ。」
驚いた。私の心が読めるのか。私は今度は口に出して、
「でも、そんな姿であなた、どこへ行けるっていうの。」
呆れたように尋ねると、同時にポピーは淡い光に包まれ、次の瞬間手のひらに乗るほどの小さな少女に姿を変えた。背中のキラキラと輝く、透き通った金色の羽をはためかせるその姿は花の妖精そのものだった。

　彼女の言葉に従って山の麓の広い湖に辿り着いた。
そこにも人影はないのになぜか複数のキャッキャとはしゃぐ、まるで鈴の音のような可愛らしい声が聞こえる。
「この湖の中に人魚がいるのよ。何か知っているかも。」
(へえ。湖にも人魚っているんだ。)
ファンタジーの世界にしか存在しない人魚を見ることができるかもしれないとワクワクしていると、ポピーは突然湖の中へと飛び込んだ。
「…えっ。ちょっと、何やってるの。」
「あなたも早くいらっしゃい。人魚の機嫌が変わらないうちに。彼女たち、気分屋だから。」
そう言うと羽を背にしまい水中へと潜って行ってしまった。
ここにいてもどうしようもない。そう思い、仕方なく湖の中へと一歩足を踏み入れる。足に感じる程よい冷たさと穏やかな水の揺れにこれまで感じたことのないような爽やかな気持

ちと、どこか懐かしさを覚えた。
湖の中へ歩みを進めていくと徐々にその深さは増し、気がつけば足はあっという間に地を離れていた。
ポピーの姿は見えない。まさか溺れたのだろうか。少々不安に思っていると、突然脚を何者かに強い力で引っ張られた。
「…っ！」
言葉を発する前に身体は既に湖の奥深くへと潜ってしまっていた。まずい。息が。そう焦りを感じ、遠く頭上に見える光を目指して泳ごうととする。
しかし、ここであることに気がつく。苦しいと思っていた呼吸がいつも通りにできているではないか。
「どうして…。」
普通に話すこともできるようだ。
そういえば、先程脚を引っ張ったのは何者だったのだろう。
ふと下を見ると、そこには鮮やかに青く光り輝くホタルイカ。色とりどりの魚がまるで音楽に合わせて踊っているかのように楽しげに泳いでいる。その中心には大きな城がそびえ立っている。よく見ると魚たちと一緒に上半身が人間、下半身が魚の姿をした人魚たちが泳いでいる。
湖の奥深くには人魚の国が広がっていたのだ。
その何とも美しく不思議な光景に目を奪われていると、1 人の人魚と目が合う。人魚には珍しい短いブロンドの髪に美しい貝殻と真珠でできた髪飾りをつけている。人魚は悪戯な笑みを浮かべ、ついて来いとでも言うかのようにこちらを一瞥し城へ向かって泳いで行った。
恐らく先程湖の中に引き摺り込んだのもこの人魚なのだろう。
なぜ水中で息ができるのか、なぜ湖の底に海底にあるはずの人魚の国があるのかなど湧き上がる疑問を押し留め、人魚の後を置いていかれないようについていく。

「あっ、やっと来た。」
城の中に入ると、ふかふかの椅子に座り、豪勢な食事を食べ、当たり前のように人魚から盛大なもてなしを受けているポピーがいた。
「いきなり湖の中に飛び込んでいなくなったから、びっくりしたじゃない。」
そう文句を言うと、
「まあ、落ち着いて。ひとまずそこにお座りなさい。」

横から透き通るような美しい声が聞こえてきた。声の主を見ると鮮やかな空色の、足元まで伸びた長い髪を持ち、豪華な装飾、艶やかな衣装を身にまとった、それはそれは美しい女の人魚がいた。
「この人魚の国の王女様よ。」
ポピーが口にものを詰めながらモゴモゴと話す。
そのあまりの美しさに言葉を失っていたが、ポピーの話を思い出して我に帰る。
「待って。確か、あなた以外は自我を持っていないって…。」
「そのことなら私がお話ししましょう。」
王女様の話によると、人魚たちはこの湖の奥深くで暮らしており、魔女の力はここまで届かず本人も水の中へは潜って来れないため呪いを免れたということだった。
「私はね、人魚の国が無事だってことを知って、力を貸してもらえないかと思ってここを訪ねたの。」
なるほど、この花の妖精は行き当たりばったりに行動していたわけではないらしい。心強く思っていると、ポピーが食べることをやめ、真剣な表情をして王女様に尋ねた。
「何か知っていることがあれば教えてほしいの。この呪いの解き方とか魔女の居場所とか。」
「ごめんなさい。居場所はわからないのだけど、この呪いを解く手がかりを得られそうな場所は知っているわ。」
「ここから南へ 10km ほど進んだところに大きな街があります。そこにとても物知りな人がいます。その方に聞けば何か分かるでしょう。」

　王女様もその街について、その人物について詳しいことはわからないらしい。とにかく、手がかりを得るために私たちはその街へ向かうことにした。
　道中なにかと役に立つだろうと王女様が人魚のフィリアという娘を寄越した。その娘は先程私を水中に引き摺り込み、城へと導いた人魚だった。そもそも人魚が陸に上がれるのかと尋ねる前にフィリアは陸を目指して一目散に泳いでいってしまった。私が水面に顔を出すとそこには既に人間の姿をしたフィリアが満面の笑みを浮かべて立っていた。どうやって人間になったんだろう。興味はあったが、あの時脚を掴まれ水中へ引き摺り込まれたことを思い出し、知らない方が良いこともあるだろうと聞くのをやめた。

「そういえば、あなた王女様に随分と偉そうな態度だったわね。どういう関係なの。」
「それは…今は秘密。気が向いたら教えてあげるわ。」

ポピーは面白そうにクスクスと笑い、私の周りをぐるっと金色の羽をはためかせてふわふわと飛んだ。

詮索をあきらめ、ぼんやりとその様子を見ていると、耳にけたたましいベルの音が飛び込む。一体何事なのかとあたりを見渡す私と対照的に、ポピーはのんびりとした様子で私の目の前に降りてくるとにっこりと微笑んで見せる。

「今日はここまでみたい、また会いましょう」

今日はってどういうこと？　その言葉が口から出るより早く、体がふわりと浮く。直後、急降下する感覚に襲われる。

目を開けると、見慣れた天井が広がっていた。

なんだ……夢だったんだ……。ほっとしたような残念なような複雑な気持ちで体を起こすと机の上のパソコンに視線を送る。昨日は結局パソコンの電源を落としたのだっただろうか。確認のため、机の前に立ちパソコンを開く。

数秒の間の後立ち上がったパソコンの画面はいつもの見慣れたものではなく、昨晩の夢の中と同じ光景が広がっていた。山のふもとの湖に、一輪のポピー。

「え……？」

思わず口から声が漏れ、手で口を抑える。

もし、あれが夢ではないのだとしたら？　手近な所にあったノートを取り出し、覚えている限りのことを書きだして頭の中を整理していく。最後のポピーの言葉を書いたところで、一つの考えが頭に浮かぶ。

（夢なんかじゃなくって、眠っている間にしか訪れることのできない世界なのかな？）

もう一度眠ってみればわかるかも。布団に戻り、目を瞑るも全く眠れそうにない。どうしようか、と目を開けると窓からふわりとオレンジ色の花びらが舞い込んでくる。珍しい、花びらが部屋の中に入ってくるなんて。両手で花びらを受け止めると「クスクス」という笑い声が聞こえた。

「明るい間は眠ったって無駄よ。私達の世界に貴方が訪れることができるのは夜の間だけなんですもの」

どうして、と心の中で問えばポピーの声はより一層楽しそうにクスクスと笑う。

「さあ、それも今は秘密。それじゃあ、今夜また会いましょう」

ポピーの声が消えるとともに、手のひらの中にあったはずの花びらもなくなってしまった。色々と教えてくれるし親切だけれども、あの妖精は肝心な所は教えてくれない。どうし

て彼女だけが自我が残っているのか、彼女の人脈、彼女についてのことは何も教えてくれない。
　悩んでいても仕方がないので、夜まではいつものように過ごすことに決めた。

　すっかり外が暗くなり、夜も深まった頃。布団に寝ころび目を閉じると、昼間に遊び過ぎたからだろうかすぐに眠気に襲われる。
　頬をつねられるような感覚に、パチリと目をあけると海の様な深い青と目が合う。一体、誰の目だっただろうか。私が驚いていると、その瞳はにやりと三日月のように細くなり遠ざかる。そこで私は、その目の持ち主がフィリアであることに気が付いた。昨日は美しいブロンドに気を取られていたが、この人魚は目まで美しい。美しさに見とれそうになったところで、昨日水中に引きずり込まれたことを思い出しハッとする。見た目に騙されてはいけない、何をしてくるのか分かったものではないのがこの人魚なのだから。
　ポピーはどこへ行ったのか、と姿を探せば湖の上を優雅にふわふわと飛んでいた。私は一声かけるとこちらへまっすぐ飛んでくる。
「あら、来たのね。それじゃあ南に向かいましょう」
　ふわふわと飛んでいくポピーの後をついて行けば、フィリアも何の文句も言わずについてくる。本当に、ポピーはいったい何者なのだろうか。街にいるという物知りな人にあったら聞いてみようか。

　黙々とあるいていると、ずっと隣に見えていた山脈がなくなり開けた場所に出る。そこには、美しい街並みが広がっていた。

「きれい…」
　思わずと言ったように私はその言葉しか言えなかった。赤レンガ作りの建物が目の前に広がっているのだ。中央には時計台があり、下の方は広場となっていた。誰かがいれば、きっと賑わいを見せていただろう場所だが、今この場では、自分たち以外の気配がない。
「こっちだよ」
　ポピーが迷いのない足取りで飛んでいく。私は昨日の湖でのやり取りを思い出した。湖の中に人魚の国があったのを知っていたように、きっとこの先にいる誰かがいる場所もポピーなら知っているのだろうと思った。そして、ポピーに案内され、私たちが着いたのは街の一角にある雑貨屋さんだった。
「ここに王女様が言っていた物知りな人がいるのよ」
「待って、ポピー。あなた人魚の王女様が詳しくは知らないって言っていた相手のことまでどうして知っているの？あなたの交友関係が不思議すぎよ」
　言葉には出していなかったが、フィリアもその深い青の目を大きく見開いて、驚いているのを私は横目でみつつ、ポピーへと疑問を投げかけた。
「秘密っ！　でも、いつか話すわ」
「また秘密なの？」
「…ごめんなさいね」
　ポピーらしくない、眉をハの字にして、少し辛そうに謝るから…。私はため息を少し長くつくと、ポピーに向き合った。
「いつかは教えてくれるの？」
「ええ、必ず。うそはつかないわ」
「…わかった。ポピーが話してくれるまで待つよ。それで、この雑貨屋にはどんな人がいるの？ポピーが案内するってことは、ここにいる人も魔女の力を受けていないってことでしょう？」
「ふふ、正解だよ。ここに住む人はね、魔力が強いの。それこそ魔女よりも、ね」
　ポピーが開けるには大変そうだったので、私が扉を開けた。カランコロンと来店を告げるベルが鳴る。店内は明かりがついていないため、薄暗い。窓から入る光が店内を淡く照らしているだけだった。ポピーはスイスイとお店の奥へと進んでいく。私とフィリアもポピーについていくと、カウンターが見えた。
「こんにちは」
　ポピーが誰もいないはずのカウンターに向かって挨拶をする。私は誰もいないのに…。と

思っていると、急に白銀が目に入った。
「…君ですか」
　腰まである長いストレートの白銀の髪に、とがった耳が目に入る。黒縁のメガネが青年の似合っていて、そして、物知りと言われるだけある、というような雰囲気をより出していた。
「なーにー？私がここに来たらいけないの？」
「そうは言っていないでしょう。珍しいと思っただけですよ」
「…ふ〜ん、まぁいいけど」
　青年とやり取りするポピーの顔は少しすねているようにも思える。ポピーと青年のやり取りをただただ黙って見ていたが、青年が…薄紫の瞳がこちらを向いた時にドキリとした。青年は私のことをじっと見た後、なにか分かったのか一つ頷いて、ポピーへチラリと視線を向けた。ポピーはどこか罰が悪そうに顔をそらした。
「初めまして、僕の名はサージ。どうぞよろしく人間のお嬢さん」
　サージと名乗った彼はエルフであり、この世界でかなりの強い魔力を持っているらしい。そして、かなり長生きしているのも相まって、知識量が多く、そのため色々な人から“物知りな人”と思われているそうだ。
　サージが入れてくれた紅茶を飲みながら、私はどうしたら魔女の魔法が解け、この街の住人たちが自我を取り戻すのか、そして、私が夜の間寝ているときだけとは言え、この世界から戻るためにどうすればいいのかを尋ねた。
「…魔女の魔法を解くためにはまだ何も言えません。ただ、今のあなたでは何かが足りないとだけ言っておきましょう」
「何かが足りない？それはどういうことなの？確かに私は急にこの世界にやってきたし、なんの力も持っていないわ」
「ええ、この世界に元々お嬢さんのような人間は存在しません。ですが、魔女の魔法がかかったこの世界にあなたは現れた。なら、どうしてお嬢さんはやってきたのでしょう」
「え？そんなこと言われても…。私はただ自分のパソコンで作業をしていただけ。終わって、電源を落とそうとしたら見慣れないアプリがあって…クリックしたらこの世界にいたの。私がやってきた理由なんて知らないわ！」
「…なるほど。そうやってこちらの世界にやってきたのですね。（ポピーが人間のお嬢さんを選んだ…いいえ、この場合彼女のためにこういった手段を取った、というべきでしょうか）」
　サージは紅茶を飲みながら、スッと目を細めてポピーを見た。ポピーはそれに気づきつつ

も同じように紅茶を飲み、受け流しているだけだ。
「お嬢さん、これは自分で気づかないと意味がない。ヒントは…そうですねぇ。この世界の今の状況がなにを示しているのかと、お嬢…」
ジリリリリ
　けたたましいベルの音が耳に鳴り響いた。
「今日はここまでみたいだね。また会いましょう」
「待って！私はまだサージさんの言葉を最後まで聞いていないわ！」
「それでも今日はここまでだよ。それが決まりなの」
　ポピーの言葉を聞きながら、私は昨日みたいに体がふわりと浮いた直後、急降下する感覚に襲われた。

「これでよかったのですか、ポピー」
　彼女が自分の世界へと戻ったのを見届けた 3 人であったが、サージがポピーへと話しかけた。
「うん、ありがとうサージ」
「はぁ…。まったく君もお人よしというか何というか…」
「えへへ、付き合ってくれてありがとう」
「…いいですよ、別に。お礼を言われることでもありませんから」
　サージとポピーがなにやら理解しあっているのを、フィリアは聞きながら、（今この状況にしたのはきっとポピーさん。理由はあの女の子のためみたいだけど…何でだろう）と状況を整理しながらも疑問は残っていく。でも、自分からは言葉を発することはしない。ただ、確信したのは魔女がかけた魔法をポピーが利用して、あの女の子に手を差し伸べたこと。フィリアは少しぬるくなった紅茶をすすりながら、きっとあと少しでこのことは解消するのだと漠然とした確信を得ていた。

　「ポピー！！」
　ガバリと起き上がると目に入るのは見慣れた自分の部屋。私は慌ててパソコンの画面を確認すると、昨日と同様に山のふもとの湖と一輪のポピーだけではなく、赤レンガのきれいな街並みも追加されていた。
「…私に足りないものって何なの」
　サージに言われたあのアプリの世界が指している状況の意味。自我かポピーや人魚たち、サージ以外に失われた自我。その状況を作った魔女。そして言いかけていたおそらく私に関

わること。ノートに書き出して、整理してもわからない。ただただサージの言葉が頭の中を駆け回る。誰かに相談したかった、誰かに思い切り自分の混乱をぶちまけたかった…。でもそんなこと今の私にできるはずがなかった。

　あれから3日経った。ポピーたちの世界へ行き、魔女のいる場所を探しながら過ごした。けれども自我を持っている人はおらず、ポピーが案内する様々な場所を探索するだけだった。
　大きな風車、様々な花が咲き乱れる野原、せせらぎが聞こえてくるような小川…。ポピーと一緒に行った場所は朝、目が覚めると自分のパソコンに追加されていくだけだった。
「魔女はどうして、自我を奪うようなことをしたんだろう…」
　魔女のいる場所を探しながら、私は魔女がそんな魔法をかけた理由が気になっていた。それに、この世界に何度も来るたび奇妙な既視感のようなものを覚えるようになっていたのだ。まる遠い昔ここに来たことがあるかのような……。

考え込みながら歩いていると魔女がいる可能性が高いという森の中に辿り着いた。木漏れ日がキラキラとまぶしい道を進むと、大きな切り株に座った少女がいた。
魔女帽を目深にかぶっていてその表情はよくわからない。
ポピーに促され、私が魔女と話すことになった。
「貴方がこの世界のみんなの自我を奪った魔女？」
「そうよ」
ずっと疑問に思っていたことを尋ねる。
「どうしてみんなの自我を奪ったの？」
魔女はぽつり、ぽつりと静かに話し始めた。
「この世界が小説の中ってことは知っている？」
「え……？」
予想外の返答に思わず固まってしまう。
「私たちは読者から、そして作者からも忘れ去られてしまっているの」
「誰からも覚えていて貰えないなんて悲しすぎるでしょ？だからお星さまにお願いしたの。この地上に住むみんなが悲しくならないようにしてくださいって」
「でも、きっと私も心の底で友達の自我まで消したいと思ってはいなかったからポピーやフィリア、サージには自我が残っていたのかもね。それにポピーはこれが私の仕業だって気

づいていたみたい。だからあなたをこの世界に連れてきたのでしょうね」
どうして私が選ばれたの？と疑問を口にしようとしたとき、彼女がそれに気づいたようにさらに言葉を紡ぐ。
「あなたがこの世界、そして私たちを考えた張本人なのだもの。あなた自身は覚えてなかったようだけどね」
電撃が走るような衝撃が私を打つ。そうだった、以前から感じていたあの奇妙なデジャヴの理由を理解した。
　幼い頃、美しいネモフィラ畑で目覚めた少女がポピーの妖精と共に旅をするお話を考えたことがある。初めて自分でお話を作った私は両親や幼稚園の友達、先生などたくさんの人に語って聞かせた記憶がある。しかし、成長するうちそんな出来事は幼いことの１エピソードとして忘れ去ってしまっていた。
登場人物は少女、妖精、人魚、賢者だったはず……。つまり目の前にいる「魔女」は主人公である「少女」ではないか。
「あなたの名前は……」
その名前を口にすると少女はにこりと笑うとこう言った。
「思い出してくれてありがとう」
その瞬間視界が光に包まれ、段々と意識が遠のいていく感覚があった。
意識が途切れるその瞬間にポピー、フィリア、サージの 3 人と少女が一緒にこちらに手を振っているのが見えたような気がした。

　目が覚めるといつものベッドの上だった。PC を点けるとあの不思議なアプリは消えていた元通りの無機質な壁紙が映る。
何故かメモアプリが開かれたままで不思議に思って読んでみると、ポピーからの書き置きのようだった。絵文字がたくさん並んだポピーらしい文面に苦笑しつつも読み進めると、彼女は「少女」があの世界の住人の自我を失くしたことを知っていて、その上で私を魔女の元へ連れていき説得させるつもりだったらしい。

メモを読み終わり PC を閉じたとき、ふわりとポピーの香りがした。